

バナナ

中二・多田 樟太朗

今、僕の常識が一つ変わった。もちろんバナナは黄色くて細長い。この山の中腹あたりに恐ろしいくらいはつきり見える、あのバナナもそうだ。山頂からの景色には、登るたびに感動させられる。でも今回は、感動とは違う。あのバナナの長さは、優に山小屋の高さを超えているのだ。

三才の息子はそのバナナを指さし、言った。

「バナナ、おっきい！」

僕たちは「うん」とも「そうだね」とも言わず黙っていた。確かにあれは大きいバナナだ。しかし僕たち大人は、その一言で済ますことはできない。なぜ大きいのか、理由が必要だ。

僕たちに無視された息子は、しばらく不満そうに地面の石ころを転がしていた。さすがに何か言わないとまずいのでは。そう思ったとき、登山仲間の一人が喋り出した。

「きっとあれは普通のバナナで、空気中の水分で、こう、上手く光が屈折して、大きく見えるんです」

「何を言っているのよ、物理学者さん。今日は雨は降ってないし、湿度だって四十パーセントもないわよ。きっとあのバナナは幻覚で、バナナが食べたいと思うから見えるんですよ」

「あー心理学者さん。んーそれは違うと思います。えーバナナ好きのあなたとは違い、あーバナナが苦手な私にも見えます。んーおそ

らくあのバナナは神の使いで：」

「牧師さーん。なんで神の使いがバナナなんだあ？ありやー絵か彫刻か：」

「てやんでえ。いくら自分が芸術家だからって、そりやおかしいだろう。あんなにでっけえ絵？彫刻？んなもん、こんな山奥に作ってどうするってんだ。それにあんなおつきいもん、こんな場所でどうやって作ったってんだ」

「だけどさあ、建築家さーん。ばらばらにして持ってきたかもしれないよねえ」

「人の話を聞け、べらぼうめえ。俺あなんだってこんな山奥に置いてんだって聞いてんだ。ありや山小屋の倉庫に決まってらあ。バナナ好きが設計したんでい」

「あんなに使いにくい形の倉庫、だれが設計なさいますの？きつとあれは倉庫じゃなくなつてよ。ほんの少しお待ちなさいな。今、あたくしが占ってさしあげますわ」

「おいおい、古い師の姉ちゃん、なんだって山に水晶玉なんか持ってきてんだ。重くて大変だろうよ」

「いつ、なにが起こるか分かりませんもの。あたくしは常に持ち歩いてますわ」

このままでは埒が明かない。僕は思い切って言った。

「あそこに行ってみてはどうですか」

「それはいい」

そういうわけで、僕たちはバナナのところまで降りた。近くで見ても、確かにそれは大きなバナナだった。

「この皮の見た目。こりやーバナナじゃないとしても果物ではあるなあ」

「果物ちゃうわ、芸術家はん。バナナはほんまは野菜なんよ。ほんでこら突然変異どすえ。大きゆうなって、この山の特別な環境に適応したんよ。こら、形から見て、うちらがよう食べるキャベンディッシュやろうけど…」

「なるほどなるほど、生物学者さん。でもでも、ただの突然変異ではないよ。なぜかってこのバナナ、木になってないでしょう。なのになのに、ずっとずっとまっすぐ立ってるよ」

「確かに不思議やな。そやけどUFOオタクはん。バナナは野菜やさかい、木にはなってへんのどすえ。あの木みたいな部分は…」

「そんなそんな、そんなことは関係ないんだ。きっときっとこのバナナには、宇宙からのものすごい、ものすごいパワー、反重力が働いてるんだ。そうとしか考えられない。やっぱりやっぱり存在したんだ。つまりつまり何が言いたいかって？これは少なくとも、宇宙から降ってきたUFO。いやいやもしかしたら、宇宙人も。ああ、ああ！ワクワクしてきた。そもそも、そもそもね、私とUFOが出会ったのは…」

「なんて話が長いんだい、UFOオタクさん。それにそれは思い違いだい。なんで宇宙のもんが、地球のバナナの形をしてるんだい。きっとこれは巨大な怪獣の卵だい。ほら、鶏の卵って殻の表面に小さな凸凹があるし、時間が経つと黄身が底に沈むだろう。だから、その気になれば立てられるんだい。この卵も誰かが頑張っ立ってたんだい。そのうち皮がむけて、怪獣が出てくるんだい」

「特撮オタクさんも話が長いですねえ。それにいくら黄身が沈んでもこれを立てるのは無理ですねえ。これは化石ですねえ。ここら辺は化石がたくさん出ますからねえ」

「ちやうやろ、地層学者さん。触るとブニブニしとるで。ほんで甘

い香りもする。これはエア遊具、通称ふわふわやで。バナナのPRイベントに使うんやろ」

「なぜそうなるのだ、イベントプランナー。このような山奥で小さい子どもが参加するイベントなんてあり得ない。これは兵器の試作。失敗し、ここに放置されたのだ。わたしは元軍人なので、よく分かる。一応、昔の上官に報告しておく。危険なので、触れないように」

なんで兵器がバナナの形なのか。僕にはちっとも分からない。それにみんな自分の専門分野に偏りすぎだ。他の視点から見ようとは全くしない。僕はまた思い切って言ってみた。

「切って中を見たらどうですか」

「あかん。突然変異の大事な資料を傷つけるなんて」

「UFOを真っ二つ、真っ二つだつて。やってみたい。でもでも宇宙戦争になりかねない」

「とんでもないことだ。怪獣が出てきたらどうすんだい。国際問題だ」

「ダメですねえ。珍しいやわらかい化石を傷つけるのはねえ」

「切ったら空気が抜けるやろ。楽しみにしとった子どもたちがかわいそうや」

「何を言っている。触れるなど言っただばかりではないか。この中には何が入っているのか、分からないのだぞ。導線が切れて爆発したり、菌がばらまかれたりするかもしれないのだ」

僕はもう何も言えなくなった。

（ボボボボゴ）急に空から強風が吹きつけてきた。ヘリだ。いっどこから伝わったのか、ニュースのリポーターが来たらしい。リポーターはヘリから大きいバナナを指さし、何か言っている。でもヘリの音がうるさくて、全く聞き取れない。こんなに風が強くて、

なぜかバナナはびくともしない。やはり宇宙からのパワーでも働いているのだろうか。やがてヘリは着陸し、リポーターやカメラマンがぞろぞろと降りてきた。

「えー、こちらが突如山に現れたという、巨大バナナです。ご覧の通り、隣にある山小屋よりも背が高く、目を疑ってしまいます。この大きいバナナを発見したという方々にインタビューしてみましよう。発見したときはどのような状況だったのですか？正体は分かりますか？こんなバナナ見たことは？」

僕たちは、次々に質問された。

その後も、別の番組のリポーターが続々とやって来た。そして僕たちは、嫌になるくらい同じことを聞かれた。それから何人もの学者が来て、メジャーを伸ばしたり、分厚いファイルを開いたり、写真を撮ったりしていた。そのうち一般の人も来て、バナナを撮ったり、バナナと自撮りをしたり。「映えー」なんて言っている。

僕たちは登山をしていたことも忘れ、大きいバナナを見つけたときから、もう四時間は経っていた。息子は少し前まで、リポーターとしりとりをしたり、なぜなぞをしたり、またしりとりをしたりしていたけれど、さすがに飽きたようで、リュックの中をあさっている。僕もそろそろ帰りたくなってきた。でも、誰も帰りたいたとは言わない。みんな一所懸命考えているのに、自分だけ帰ろうとするのもおかしいだろう。帰りたいのは僕だけなのか、実はみんな帰りたいのか。僕はいつの間にかそのことばかり考えていた。息子はついに、おやつバナナを見つけ、食べ始めた。

「分かりましたわ。この大きいバナナは……」

古い師さんが言いかけた瞬間、山の向こうから大きな音が鳴りだした。ヘリではない。足音だ。それも大勢。姿が見えてきた。全身

黄色の格好で、まさにバナナのよう。ざっと百人はいる。考え込んでいた登山仲間や、がやがや話をしていたりポーターも気づいた。ぶつかる。そう思って逃げようとしたが、バナナの集団が本気で走ってくる姿に圧倒され、動くことすらできなかつた。僕は歯を食いしばり目をつぶった。でも痛くも痒くもない。それどころか体が軽くなつた。夢の世界へ来たような感じだ。僕はゆっくり目を開いた。

世界がいつもよりも澄んで見える。宇宙の端まで見えそうだ。でも、バナナの集団はもう見えない。いや、もう一つ見えないものがある。大きいバナナだ。みんなも、大きいバナナがないことに気づいたらしい。僕たちはまた黙ってしまったけれど、リュックの横でバナナを食べ終えた息子が、「バナナ、ないないね」と言った。

確かにバナナはなくなつた。しかし、僕たち大人は、その一言で済ますことはできない。どうしてなくなつたのか、理由が必要だ。

『あくまで議論が始まる。嫌だなあ』

そう思っていると、登山仲間たちは息子にやさしく、「そうだね。大きいバナナなくなつちやつたね」と答えた。

息子が得意気にこつちを見た。僕は何が起こつたのか分からなくなつた。でもすぐになんでもいいやと思ひ直し、速足で行つてしまふ登山仲間と、山を下つた。

誰もいなくなつた後、そこには水晶玉だけが残された。その中にはたった一つ、あの大きなバナナが映っている。



画：死後くん
